

歴史を織りなすキルト

女性たちがキルトに織り込んだ、さまざまなメッセージ。一枚一枚が集まり、コレクションとなったとき、アメリカという国の歴史を語り出すのかもしれない。



唯一の大学付属キルト研究センター・博物館

インターナショナル・キルトスタディセンター・アンド・ミュージアムは、アメリカ合衆国ネブラスカ州リンカーンにあるネブラスカ大学付属のキルト研究センター・博物館である。「キルト・ハウス」とよばれるその建物自体が、三つの層をもつキルトをイメージしており、内部は、自然の光のなかでキルトを感じる事ができる回廊や空間から構成されている。唯一の大学付属キルト専門博物館として、世界のキルト収集とその研究を推進してきた。世界各地から訪れる研究者、コレクター、ディーラー、そして一般市民とともにキルトを味わい、情報を交換する場となっている。入り口付近には市民が作成したキルトも展示されており、展示の説明にも市民ボランティアが活躍している。

世界各地から収集されたキルトは、昆虫やゴミなどを取り除き、情報収集や共同研究などの過程を経て保存される。キルトの保存には化学薬品は使用せず、密封した部屋に静かに数ヶ月置いておき、出てきた昆虫を専用の掃除機で吸い取る方法をとっている。研究に際しては、何枚ものキルトを同時に広げることができ、ゆったりとした部屋で、キルトのまわりに人びとが寄り集まり議論を重ねている。また、キルトの写真を撮影する地下の部屋は、この地域で頻発する竜巻などの際のシェルターを兼ねている。

ミュージアム・ショップでは展示に関する書籍のほか、ミュージアムグッズとして、待ち針をモチーフにしたショルダーバッグとポシェットのセットを販売している。センターの研究者たちが、自分たちが使いたいデザインにこだわって開発したものだという。

コレクション

収蔵品の数は三五〇〇点を超え、公共機関が有する世界最大規模のものとなっている。その元となっ

ているジェイムス・コレクションは、一九世紀後期からのアーミッシュとメノナイトのキルトが大部分を占めており、その大多数は、オハイオ州やインディアナ州を中心に、中西部のものである。そのうちの一〇〇以上ものキルトが、「スタジオ・アート・キルト・ムーブメント」（伝統的なパターンや色に基づく製作法に従うのではなく、新しいアートとしてのキルトを創造しようとする一九六〇年代以降の活動）のなかで生み出され、ワシントンD.C.のテキスタイル博物館をはじめ著名な博物館で展示されたほか、東京国際フォーラムでも展示され、一〇万人を動員した。

カーゴ・コレクションは、主としてアラバマ州のアフリカンアメリカンの女性たちが作った一五六のキルトから構成される。サラ・ミラー・コレクションの九九のアーミッシュ・クリブキルト（子ども用ベッドカバー）は、一九八〇年代最初から中期までに集められたものである。主として、中西部から収集され、アーミッシュ・キルトに特徴的な暗い深い色のものが多いが、一九三〇年代と一九四〇年代のより明るくはっきりした色のものも含まれている。

キルトが歴史を物語る

二〇一二年におこなわれていた展示は、アメリカ合衆国で歴史上特に人気のあるモチーフを含むキルト、アートとしてのキルトを追求する活動のなかで作られてきたキルト、およびインディゴインク（歴史を反映したキルトの三種から構成されていた）。

移動してゆく人びとに贈られる「フレンドシップ・キルト」は、アルバム・キルト、シグネチャー・キルトともよばれ、新しいステップを踏み出す人びとの行く手の無事と繁栄を祈って、贈る人びと自身の名前を入れたキルトである。

また、第二次世界大戦中に作られた、「V」の字をモチーフとした「ピクトリー・キルト」や黒人奴隷の生活を描き出したキルトなどは、人びとの信条や考え方をキルトによって見るものに伝えようとしたものである。インディゴ・プリンティングの歴史と技術の展示では、さまざまなインディゴの色が美しいキルトを生み出してきたこと、そして、インディゴの色によりキルトの製作時期を推測できることなど、科学技術とキルトとの関係が提示されている。

キルトは、表布、裏布、中綿の三つを縫い合わせてベッドカバーなどとして実用的に用いられてきたものであるが、アメリカでは複数の表布を組み合わせたパッチワークが人気があり、一枚のキルトに何人もが参加して制作されることも多い。キルト好きなボランティアたちにとっては、キルトが、ひとつのコミュニケーション・ツールとして多様な人びとによって育まれてきた文化であることを感じさせるものであった。

鈴木七美
民博先端人類科学研究部



黒人奴隷の生活を描いたアート・キルト



キルトに関する研究ミーティング



キルトの保管棚（現在研究中の中国のもの）



自然の光のなかでキルトを見ることができる回廊



博物館外観。著名な建築家によって設計された